

ベストクラス選定理由書

作成者：草場和歌子、永田智子、小峰咲季、磯俣南星、和田祥、安福一翔、森野光太郎、宮内元

科目名称：コーディネーター概論(昼間クラス)		(担当教員名：石橋由紀子)
課程：大学院(修士)	開講時期：前期	
授業形態：講義	授業規模：31人以上	
インタビュー対象教員名：石橋由紀子 (実施日時：2023年8月29日；実施場所：Zoomによる実施)		
インタビュー対象受講者名：谷口智美 (実施日時：2023年8月29日；実施場所：Zoomによる実施)		
インタビュー対象受講者名：村上雪乃 (実施日時：2023年8月30日；実施場所：Zoomでの実施)		
【選定理由】 コメントより、「1週間後の授業を楽しみにできる」というものがあつた。これは簡単なようで、このような授業をするのは難しいと思われる。受講者がこのようなコメントを書くのは、この講義が非常に充実したものになっているからであると考えることができる。また、受講人数が多いが、コメントの数も多いという事が本講義の特徴である。先生が目が行き届いている証拠と言える。 また、授業の中でゲストティーチャーを招いている。これは現場との結びつきが考えられており、現場で使える知識の提供がなされているという事である。受講方法についてもオンライン、対面又はハイブリッドを受講生が選べるという事で、ICT機器の活用がなされていると言える。以上のことから本講義をベストクラスに選定した。		
【担当教員へのインタビュー】 ・講義の工夫点を聞くと、知識を伝えるのも大事だが「コーディネーター」を体験できる仕掛けを作っていること、教員が一方的に授業を作るのではなく、受講生も含めて皆で作るという事(=アクティブラーニング)を挙げられていた。 ・皆で授業を作るには、受講生と教員の繋がりを意識しなければならないが、そういったことをするためのアイデアは何処から来るのかということに関しては、少しずつ変化して、今のような授業形態になったと言われていた。実は、初期の講義は一斉授業が中心であったが、様々な工夫(グループワーク、ワールドカフェ等)をすることで今の形態になったと言う。変化の契機になったのは「学級経営のポイント」を意識することであった。その意識は、教員が生徒と繋がり、次のステップでは教員がみているところで生徒同士が繋がり、最終的には教員が居なくても生徒同士が繋がるという3段階構成になっている。その中で徐々に主導権を教員から生徒へと渡すという事を行うことでアクティブラーニングへと繋がるという事を言われた。 ・ゲストティーチャーを招く意図は2つあり、1つ目は担当教員自身がコーディネーターとしての現職経験が無く、第一線で活躍している人には及ばないということ、2つ目は受講生が現場に帰っていった時のモデルになるようにという事である。		

・教員がアクティブラーニングを含む「対話」を重視する意図は、受講生がこれから実現するであろう「何か」を見つけるためには対話による気づきが大事であり、特別支援教育は何もないところからは始めることはできないので、対話を通して講生同士の良い知恵を広めて行くことは大事であるという事である。対話に関しては、現職の先生が有利(経験、知識)だがストレート生の素朴な疑問が現職を揺さぶることがある。現職の先生とストレート生が同じ土俵に立てるように配慮をしていたと言う。

・教員が受講生に伝えたいメッセージとして、知識は古くなるが皆に繋がって欲しいと言われていた。特に特別支援教育に関心を持っている人が少ないので、そこで繋がりがあれば、助け合える環境が生まれる。まずは繋がることの大切さを感じて欲しいと語られていた。

【受講生へのインタビュー】

・受講生のお二人に印象に残ったものを聞くと、コーディネーター経験がある先生の話が聞けること、授業の最初には受講生の感想の共有があった事から色々な考え方を知ることが出来たと言われていた。また受講生の一人は、難しい場面でもイラストによる説明があったことで理解しやすかったと言われていた。

・ゲストティーチャーに関しては、今の自分の学びが、どう将来につながるのかを考えることができ、より学びが深まった。不安なことも解消でき、自分のできることを努力することの大切さを感じたと述べられており、現場とのリンクが図られる印象を受けた。

・授業形態に関しては、オンラインだからこそ繋がれた人も居たという事が挙げられた。オンラインの良さは対面では話せない人と話せることだと述べられていた。

【まとめ】

以上のことから、本科目をベストクラスとして推薦する。